

活用形の用法一覧

※ 色を付けてマークした用法は、用例が多く、特に注意すべき用法である。

活用形	単独用法	接続用法			用例	解説
		助動詞	助詞	その他		
未然形 (「まだそうなっていない」形)		る、らる、 す、さす、しむ			<ul style="list-style-type: none"> 今一声呼ばれていらへんと、念じて寝たるほどに、…。(宇治拾遺物語) 物申しさぶらはん。おどろかせ給へ。(宇治拾遺物語) 	
		ず			<ul style="list-style-type: none"> 前後一向にわからぬことばかりなり。(蘭学事始) 	
		む(ん)、まし、じ			<ul style="list-style-type: none"> いつの日に帰らぬ(故郷) これに過ぎたることはよもあらじとぞ申し侍りける。(一寸法師) 	
		まほし			<ul style="list-style-type: none"> いかなる人なりけん、尋ね聞かまほし。(徒然草) 	
連用形 (用言につながる形)	連用中止法				<ul style="list-style-type: none"> 「堆」と訳さば正当すべし。(蘭学事始) また、さらでも、いと寒きに、…。(枕草子) 何方へも行かばやと思ひ、…。(一寸法師) 	「ば」は未然形に付く場合は順接仮定条件、已然形に付く場合は順接確定条件。
		き、けり			<ul style="list-style-type: none"> 都に上り、ここやかしこと見るほどに、…。(一寸法師) 花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。(徒然草) 役人の子はにぎにぎをよく覚え(誹風柳多留) 	文を途中で一時中止する用法。
		つ、ぬ、たり			<ul style="list-style-type: none"> 青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも(土佐日記) これも今は昔、比叡の山に児ありけり。(宇治拾遺物語) 	
		けむ(けん)			<ul style="list-style-type: none"> 雪の降りたるは、言ふべきにもあらず。(枕草子) 飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。(土佐日記) 	
		たし			<ul style="list-style-type: none"> 今一度対面して、申したき事のあるはいかがすべし。(平家物語) 	
		て、して			<ul style="list-style-type: none"> 男、いと悲しくて、寝ずなりにけり。(伊勢物語) 	
		つつ、ながら			<ul style="list-style-type: none"> 夕ざりは帰りつつ、そこに来させけり。(伊勢物語) 	
		そ			<ul style="list-style-type: none"> や、な起こしたてまつりそ。(宇治拾遺物語) 	
		てしが、てし がな、にしが、に し がな			<ul style="list-style-type: none"> いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、…(竹取物語) 	
		ようげん 用言			<ul style="list-style-type: none"> 雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。(枕草子) 心の中に嬉しく思ふこと限りなし。(一寸法師) 	
終止形 (終止する形)	終止法			<ul style="list-style-type: none"> 雨など降るも、をかし。(枕草子) 事の体、何となう衰れなり。(平家物語) 		
		らむ(らん)			<ul style="list-style-type: none"> 風吹けば沖つ白浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ(古今集) 	「らむ(らん)」「べし」「まし」「らし」「めり」「なり」(伝聞・推定)は、基本的に終止形に付くが、ラ変型の活用語に付く場合は連体形に付く。 例：御疑ひあるべからず。(平家物語) その人ならば苦しがるまじ。(平家物語)
		べし、まじ			<ul style="list-style-type: none"> 「堆」と訳さば正当すべし。(蘭学事始) かの国人、聞き知るまじと思ほえたれども、…。(土佐日記) 	
		らし、めり、なり (伝聞・推定)			<ul style="list-style-type: none"> 侍従の大納言の御女なくなり給ひぬなり。(更級日記) 	
		とも			<ul style="list-style-type: none"> 門を開かれずとも、此きはまで立ち寄せ給へ。(平家物語) 	
な			<ul style="list-style-type: none"> あやまちすな、心して降りよ。(徒然草) 			

かつようけい 活用形	たんどくようほう 単独用法	れんせつようほう 連接用法			ようれい 用例	かいせつ 解説
		じょどうし 助動詞	じよし 助詞	その他		
れんたいけい 連体形 (体言につながる かたち 形)	じゆんたいほう 準体法				なみ しろのみきのみぞ見ゆる。(土佐日記)	かつようご れんたいけい たいげんもち 活用語の連体形が体言のように用いられる用法。
	しゅうしほう かか むす 終止法(係り結び)				つき うみよりいときにつき ・その月は海よりぞ出でける。(土佐日記)	けいじよし 係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」がある場合、原則として連体形で結ぶ。
	しゅうしほう れんたいど 終止法(連体止め)				・これはいかなることにてあるべきと考え合ひしに、 らんがくごははじめ …。(蘭学事始)	「いかが」「いかなる」「など」等の疑問表現がある場合、連体止めになる。
		だんてい なり(断定)			すずめ こいぬきにげんじものがたり ・雀の子を、犬君が逃がしつる。(源氏物語)	れんたいど えいたん よじょう あらわ 連体止めで詠嘆、余情を表す。
		ごとし			いちぢやう かい うらん ・一行も解し得ることならぬことにてありしなり。(蘭学事始)	
			が、に、を		ゆ みづ かへ まんようしゅう ・行く水の還らぬごとく(万葉集)	
			ものの、ものを、 ものから、もの ゆゑ	かんりやく いちせうさつ みあはらんがく ・簡略なる一冊ありしを見合せたるに、…。(蘭学事始)		
				しが みやこむかし やまざくら ・さざなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな(平家物語)		
				きみ こよす たの ・君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞふる(新古今和歌集)		
				まさな ひと わい たま うじしゅういものがたり ・幼き人は寝入り給ひにけり。(宇治拾遺物語)		
				ごくせんじょうど いぬあくら くら ・極楽浄土の成亥の、いかにも暗き所へ、やうやう逃げにけり。(一寸法師)		
いぜんけい 已然形 (「既にそうなっている」形)	しゅうしほう かか むす 終止法(係り結び)				みやこ やま けみ つき なみ い なみ ・都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ(土佐日記)	けいじよし ばあい げんごく 係助詞「こそ」がある場合、原則として已然形で結ぶ。
	ぎやくせつほう かか むす 逆接法(係り結び)				・この女をほかに追ひやらむとす。さこそ言へ、まだ追ひやらす。(伊勢物語)	けいじよし むす あと 係助詞「こそ」とその結びがあってその後も文が続く場合、逆接になる。
		り			いま おも ひと よ うた ・今、そのかみを思ひやりて、ある人の詠める歌、 ときにつき …。(土佐日記)	「り」がサ変動詞に付く場合は未然形に付く。 れい れんじょう たま え こち らんがく 例：・連城の玉をも得し心地せり。(蘭学事始)
			ど、ども		もろこし くに ことごと つき かげ ・唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、…。(土佐日記)	
			ば	えん はな た い ごらん ひと いっ ・縁の端へ立ち出でて、御覧ずれども人もなし。(一寸法師)		
				つき かげ おな ひと こころ おな ・月の影は同じことなるべければ、人の心も同じこと にやあらむ。(土佐日記)	「ば」は未然形に付く場合は順接仮定条件、已然形に付く場合は順接確定条件。	
めいれいけい 命令形 (命令する形)	めいれいほう 命令法				・かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵 さだめよ いせものがたり さだめよ(伊勢物語)	
	ほうにんほう 放任法				いま さいかい なみ そこ しづ しづ きんや ・今は西海の浪の底に沈まば沈め、山野にかばね へいけものがたり をさらさばさらせ、…。(平家物語)	ものごと 物事のなりゆきにまかせて、「…てもかまわ ない」という気持ちを表す。